

「テキストとしての社会」が交差する空間

遠藤 英樹

1. テキストとしての社会

人びとが日々の暮らしの中でたえず創りあげている社会的リアリティを発見し語ること、これが社会学の大切な営みである。社会的な現象や出来事は、語られてはじめて意味を持つ。語られることのない社会的な現象や出来事はそもそも、私たちにとって何の意味もないだろう。しかし、人びとが創りあげる社会的なリアリティを正確に、客観的に語ることは果たして可能なのだろうか。

このことについて非常に自覚的に考察を展開したものとして、J.クリフォードとG.マーカスの編集による『文化を書く』という論文集がある。この論文集は社会学者というより、どちらかと言えば文化人類学者の手になるものだが、しかし上のような問題が鋭く論じられている。この書物によれば、民族の社会組織や宗教、価値観など、そうしたものを文化人類学者がフィールドワークで見出し、それを正確に、客観的に語ることなどできないと指摘され、そもそも「書くこと」「語ること」それ自体、「つくられたもの」としての何かを生むのだと主張されているのだ。



図1 『文化を書く』表紙

出典：<http://images-jp.amazon.com/images/P/4314005866.09.LZZZZZZZ.jpg>

以上のように考えるなら、「語る」という行為と社会的リアリティは切り離すことができないと言えるだろう。語ることから離れて、社会的リアリティは存在しない。「語る」という行為は社会的リアリティを客観的に写しとる透明な鏡ではなく、それ自体がある位相の社会的リアリティを、つまりは「つくられたもの」を生みだしてしまうものなのだ。この点で社会とは、一定の視点から書かれ語られた複数のテキストなのだと考えることができよう。

しかしながら社会学者や文化人類学者といった研究者だけが、社会を語るわけではない。研究者以外に日常世界の中で日々を暮らしている生活者もまた、「自分の人生をも他者の人生をも、物語として理解し、構成し、意味づけ、自分自身と他者たちとにその物語を語る、あるいは語りながら理解し、構成し、意味づけて」いる（井上1996：25）。社会をテキストとして織りあげているのは、こうした生活者でもあるのだ。

すなわち社会というテキストには、二人の著者（オーサー）がいる（小林2000：101）。一人は、自己の経験を語る生活者であり、もう一人はそうした語られた経験によって創られるリアリティを言葉に紡ぎ特定の人に伝達しようとする研究者である（テレビや新聞、雑誌などマスメディアによる語りもこちらに位置づけられる）。ただし、こうした区別はあくまでも便宜的であるべきだろう。なぜならば、研究者もまた一人の生活者に過ぎず、研究者の紡ぎだす言葉だけが特権化される理由はどこにもないからだ。むしろ研究者の語りと生活者の語りは共犯関係を形成しつつ、「テキストとしての社会」を織りあげているのではないか。さらに言うなら、「テキストとしての社会」を語り織りあげていくという点では、研究者も生活者もなく、複数の語り手たちだけがいると言うことができよう。

例えば、環境破壊という社会問題は、研究者やマスコミ、生活者を含めた複数の語り手たちが「環境破壊は社会問題である」といった言説を紡ぐことで構築しているものである。すなわち環境破壊という社会問題が客観的に存在しているのではなく、人びとがある現象を環境破壊として語る中で、それが「問題」として生みだされてくる。こうした視点は、社会学では構築主義という考え方に色濃く見ることができる。構築主義とは「社会的な現象や出来事は客観的に存在しているのではなく、人びとの語りや実践の中で構築されるものとする」考え方なのである¹⁾。

以上のように社会をテキストとして見るならば、そこには常に「語り」の問題がついてまわることになる。「語り」の問題は、誰が、どの視点から、何のために、いつ、どこで、いかに語るのかといった「語り方」あるいは「解釈の仕方」を常に問わずにはいられない。これによって語られる内容も大きく変わってしまうのである。すなわち、「語り方」「解釈の仕方」が社会の相貌までも変えてしまいかねないのだ²⁾。語るという行為は、必ず解釈の問題を内包するのである。社会学の主要な認識形式である社会調査でも以上のことは見てとれるが、次にはそれについて見ていくことにしよう。

2. 社会調査という「語り」

社会調査は、インタビューによるもの、参与観察によるもの、記録文書を分析するもの、手紙や日記を分析するもの、会話を分析するもの、質問紙調査によって得られた反応を分析するものなど多岐にわたっているが、それらは社会学の主要な認識形式となっている³⁾。

例えば「シカゴ学派」と呼ばれる、20世紀初頭から中頃にかけて米国シカゴ大学で仕事をした社会学者たちを取りあげてみよう。「シカゴ学派」の一人N.アンダーソンは「ホーボー」と言われる渡りの労働者をテーマに、自らもホーボーとなりホボヘミア（彼らの溜まり場）で生活をともにしながら、参与観察やインタビューを行ないつつ、その成果を著している。他にもF.M.スラッシャーの『ギャング』、L.ワースの『ゲッター』、H.W.ゾーボの『ゴールドコーストとスラム』など、彼ら「シカゴ学派」の研究者たちは都市の非行、ギャング、貧困、スラムといった現象を語りつつ、都市空間の生成を鮮やかに描きだしている。その際、彼らがその認識形式として採用したのが参与観察やインタビューだったのだ。参与観察やインタビューといった社会調査を行なうことで、彼らは調査対象者から様々な言葉をすくいあげ、その語りと共犯関係を形成しつつ、都市における社会的リアリティをテキストとして織りあげていったのである。こうして見ると、社会調査も一つの「語り」に他ならないことが分かるだろう。インタビューや参与

観察などは、まさに調査対象者から得られた言葉をすくいあげることで成り立つ認識形式である。

だがインタビューや参与観察だけが「語り」なのではなく、質問紙調査もまた同様である。質問紙調査とは質問紙に対する人びとの反応をデータとするものだが、そうして得られた反応も一つの「語り」に他ならない。多くの場合それは数値で表されるが、数値という形であれ、言葉という形であれ、あるいは身振りや映像という形であれ、どんな形であれ、一つの「語り」であることに変わりはないだろう。

このように社会調査が一つの「語り」であるならば、社会調査によって得られたデータ（語られたもの）も、社会の何らかの相貌を生みだしてしまう「解釈」を既に内包していることになるだろう。データ（語られたもの）は、研究者の視点と共鳴し社会というテキストを織りあげることになるのだ。どのような言葉がすくいあげられ、それがどのような視点から分析されるのか、これが社会的リアリティの意味までも変えてしまうことになる。質問紙調査においても、どのような質問が行なわれることで、どのような数値がデータとして拾いあげられ、それがどのような統計的手法によって分析されるのかによって、描きだされる社会のあり方は大きく変わってしまうのである。それゆえ社会調査においても、誰が、どの視点から、何のために、いつ、どこで、いかに語るのかといった「語り方」あるいは「解釈の仕方」を問うことが要求されるのだ。その意味で社会調査は、何らかの社会性・制度性・政治性を帯びざるをえないと言えよう。このことを考える上で、データ・アーカイブの問題は重要である。

データ・アーカイブとは主に質問紙調査のデータを整理、保存し、その散逸を防ぐとともに、学術目的での二次的な利用のために提供する機関のことであるが、欧米では、このデータ・アーカイブを設立し、調査データベースを構築しようという試みが早い時期からなされてきている。

例えば、1976年には欧州社会科学調査データ資料委員会（Council of European Social Science Data Archives：CESSDA）が設立され、1977年には社会科学の調査データや資料収集の国際組織であるIFDO（International Federation of Data Organization）が設立されている。またアメリカでは、ミシガン大学に本部を置くICPSR（Inter-University Consortium for Political and Social Research）といったような、データ・ライブラリーに関する世界的規模の大学間のネットワークが創られるにいたっている。

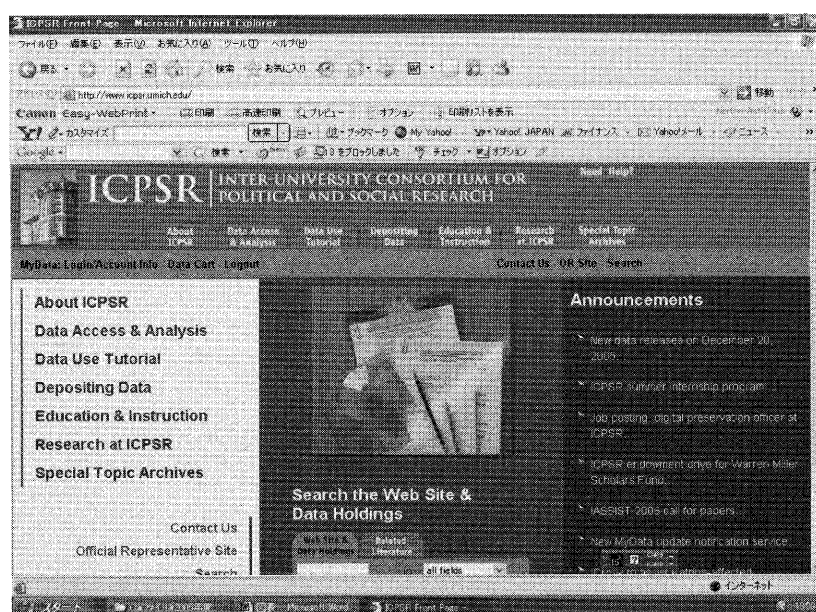


図2 ICPSRのウェブ・サイト
出典：http://www.icpsr.umich.edu/

こうした欧米での流れを受け、日本でも近年、いくつかのデータ・アーカイブが設立されるようになった。その一つに挙げられるのが、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターが事務局となって構築されたSSJデータ・アーカイブ（Social Science Japan Data Archive：SSJDA）であろう。また札幌学院大学社会情報学部が事務局となっている社会・意識調査データベース（Social and Opinion Research Database：SORD）も、SSJデータ・アーカイブより一足さきに日本で構築されたデータベースとして重要である。

こうした調査データベース構築の試みは、ある種の社会性・制度性・政治性の中で生まれてきたものであると言える。例えば、こうした試みは、調査データという「語り」を共有しオープンな対話を可能にすることが、社会科学の発展において大切であるという社会的な価値観を前提としていることを考えてみてもよい。さらに「語り」のネットワーク化とも言うべき社会調査データベースが実現されるには、技術的にも思想的にも社会性・制度性・政治性に深く規定された「ハイパーテキスト」の存在がどうしても必要であったことも強調しておくべきであろう。「ハイパーテキスト」を体現するインターネット技術がこれほどまでに発展・普及しなかったとしたら、調査データベースは世界的な規模で拡がりを見せることはなかったのではないか。以下では、この「ハイパーテキスト」について社会学的視点から述べていくことにしたい。

3. ハイパーテキストについて

ハイパーテキストとは、「関連性のある文字、画像、音声などのデータを、それぞれリンク（連鎖）させて情報を表現し、かつ検索できる」テキストのあり方を言う（小菅1995：366）。インターネットのホームページでよく用いられるHTML（Hyper Text Markup Language）で書かれたテキストが代表的なハイパーテキストであり、この場合、表示されたキーワードや図形、ボタンをコンピュータのマウス等でクリックすることで、リンクされたページに自動的に移動できるようになっている（ワイツプロジェクト2000：190）。「ネットワーク上で結ばれたコンピュータの情報を相互に関連づけ、参照できるようにしたソフト」であるWWW（World Wide Web）と、これに「ビジュアル要素を取り込み、テキストばかりでなく、音も映像も扱えるようにした」ブラウザ・ソフトが開発・普及・発展したことにより、ハイパーテキストは現在、私たちの日常生活になくしてはならないものとなっている（矢野2000：59）⁴⁾。

もちろん私たちが社会を語る上でも、ハイパーテキストは大きな力を発揮していると言える。先に見たデータ・アーカイブもその一例であろう。データ・アーカイブとは、社会を語る一つの形としての社会調査によって得られたデータを収集・整理・保存するデータ・ライブラリーであるが、そうしたデータの図書館とも言うべきデータ・アーカイブがハイパーテキストによって実現されているのである。

だが社会調査という「語り」だけが、ハイパーテキストにおいて流通しているわけではない。社会学者をはじめ様々な分野の研究者たちが紡ぎだす言葉もまた、ハイパーテキストによって私たちのもとに届けられるのである。アリアドネというWWW上のサイトを見ると、多種多様な研究に関連した文献・資料がリンクされ検索できるようになっていることがよく分かる（図3）。

さらに私たちが生活者として自己や他者の経験を語り意味づけようとする際にも、ハイパーテキストは重要なツールとなっている。図4は妊娠、出産、育児に関するホームページであるが、このサイトの伝言板等を見ると、出産や育児をめぐるそれぞれの悩み、相談、アドバイスといった「語り」が紡がれているのが分かるだろう⁵⁾。



図3 アリアドネのウェブ・サイト
出典：<http://ariadne.jp/>

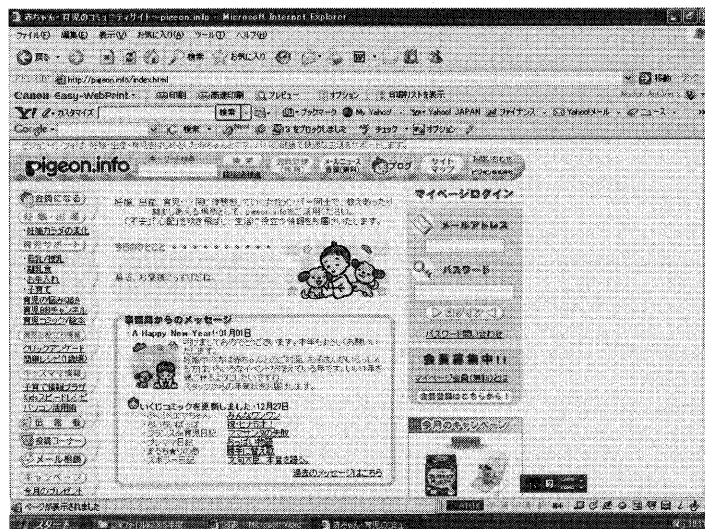


図4 妊娠・出産・育児に関するウェブ・サイト
出典：<http://www.pigeon.info/>

このようにハイパーテキストは、研究者、社会調査、生活者たちによって紡ぎだされる「語り」をはじめとして、マスメディア、企業による言説までも収集・検索され、それらが交差する空間となっている。この空間では複数の「語り」が縦横にリンクをはられ、つながられているが、そのリンクのされ方によって「語り方」も変化する。それに伴い社会も別の相貌を見せるにいたるのだ。この意味で、ハイパーテキストは多様な「語り」が収集・検索される社会空間であり、しかも「テキストとしての社会」が交差し、常に新たな社会の相貌を生む、生きた空間であると言えるだろう。

このハイパーテキストを思想面から牽引したのがT.ネルソンである。彼はこれまでに存在した書物という紙のメディアが直線的（リニア）で硬直的すぎると指摘し、もっと柔軟に多様なテキストが結びつきうるメディアが必要だと考えた。彼は次のように述べている。

「テキストの連続性（リニアである性質：筆者注）は、言語の連続性と印刷および製本の連続性を土台に成立する。このふたつの単純で当たり前の事実によって、私たちはテキストは本来ひとつなが

りのものだと考えるようになった。これが、表現は本来連続したものであるべきだという誤った議論を導いたのである。....しかし、連続性は必要ではない。思考の構造自体、連続ではない」(Nelson 1981=1994: 76)

こうしたアイデアは、グーテンベルグの印刷術以来、普及した書物のあり方について大きな転換を迫るものであった。ハイパーテキストは、既存の書物が有する直線性というリニアな時間の流れを超えて、多様なテキストが縦横に交差する空間を創りだしたのである。

おわりにーバベルの図書館へー

以上に見てきたように、社会学が対象とする空間においては、多様な「語り」によって、複数の「テキストとしての社会」が交差し、常に新たな社会の相貌を生み出している。それは、アルゼンチンの作家J. L. ボルヘスが書いた短編「バベルの図書館」のイメージに通底するものではないだろうか。

この作品でボルヘスは、世界(universe)を無限に広がる図書館になぞらえている。そこは「あらゆる言語で表現可能なもの」すべてが収蔵されており、決して出口が見つからない。「図書館は無限であり周期的である。どの方向でもよい、永遠の旅人がそこを横切ったとすると、彼は数世紀後に、おなじ書物がおなじ無秩序でくり返し現れることを確認する」(Borges 1956=1984: 55-61)。

こうしたイメージは、まさに本稿で述べた「テキストとしての社会」が交差する空間に当てはまるものと思われる。それは終わることがない、無限の生きた空間であり、そこでは多様な「語り」、表現されたものが収蔵され、リンクがはられている。「あらゆる言語で表現可能なもの」すべてが収蔵されているが、無限の生きた空間であるという意味で、それは全体性(totality)としては決してとらえることのできないものである。全体性(totality)をとらえたと思ったとしても、次の瞬間には、別の相貌を見せてしまっているのである。それゆえ「テキストとしての社会」が交差する空間をとらえようとする視線は、つねに部分的、表層的なものにとどまらざるを得ないのだ。だが別の言い方をすれば、「テキストとしての社会」が交差する空間には、「部分／全体」、「表層／深層」といった区別そのものがすでに無化されてしまっているのではないか。そうした社会空間をこそ、私たちはボルヘスが言う「永遠の旅人」として無限に歩き続けているのである。

【注】

- 1) “constructionism”という同じ原語をもち同じ系譜に位置づけられるにもかかわらず、日本の社会学では「構築主義」と「構成主義」という訳語をあて二つを区別しようとする論者も多い(例えば千田2001、赤川2001)。それによれば「構築主義」の方は社会的な現象や出来事を客観的に記述することが可能だとする「客観主義」に対抗するものとしてあり、「構成主義」の方は社会的な現象や出来事は本来的・本質的に決定されているのだとする「本質主義」(例えば性差は生物的な要因によって説明しようという言説)に対抗するものとしてあるのだとされる。しかし「社会的な現象や出来事は客観的に存在しているのではなく、人びとの語りや実践の中で構築されるものだとする」考え方は「構築主義」「構成主義」どちらの考え方においてもポイントであって、そうだとすれば、両者を区別することが果たして生産的な議論にどこまで結びつくのか筆者には疑問である。
- 2) 「語り方」も含めて社会をレトリックの問題として論じたものにR. ブラウンの著書がある(Brown1987=1989)。本稿はこのブラウンの著書に大きな示唆を受けている。
- 3) これら多岐にわたる認識形式を「社会調査」という一つの枠組みにまとめてあげていくには、長い道のりが必要であった(佐藤2000: 98-103)。これ自体、非常に重要な分析テーマであるが、本稿は社会調査史をテーマとした

ものではないため、そういった問題の細部に立ち入らないでおく。これについては稿を改めて、別のところで考察したい。

- 4) WWWを開発したのはスイスの欧州合同原子力核研究機関（セルン：CERN）に勤務していたティム・バーナーズリーと同僚たちである。彼らがWWWを開発したのは核研究における情報の喪失を防止するためであった。またブラウザは1993年、イリノイ大学の学生であったマーク・アンドリーセンによって「モザイク」という名で開発されている。現在頻繁に使用されている「ネットスケープ・ナビゲーター」も「インターネット・エクスプローラー」も、この「モザイク」を源流としている（矢野2000：59）。
- 5) ここでは「2ちゃんねる」といったネット掲示板、さらには「mixi」「GREE」「Orkut」といったSNS（Social Networking Service、あるいはSocial Networking Site）については考察を展開していないが、「テキストとしての社会」が交差する空間を形成しているものとして、これらは非常に重要である（北田2005、鈴木2002）。これらについても稿を改めて、考察を展開したい。

【参考文献】

- 赤川学（2001）「言説分析と構築主義」上野千鶴子（編）『構築主義とは何か』（pp.63-83）東京：勁草書房
- 東浩紀（2001）『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』東京：講談社現代新書
- Borges, J.L. (1956). *Ficciones*. Emece Editores. 篠田一士訳（1984）『ラテンアメリカの文学1 伝奇集・ボルヘス』東京：集英社
- Brown, R.H. (1987). *Society as Text: Essays on Rhetoric, Reason, and Reality*. Chicago: University of Chicago Press. 安江孝司・小林修一訳（1989）『テキストとしての社会——ポストモダンの社会像』東京：紀伊国屋書店
- Clifford, J. and G. Marcus eds. (1986). *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press. 春日直樹他訳（1996）『文化を書く』東京：紀伊国屋書店
- 井上俊（1996）「物語としての人生」井上俊他（編）『岩波講座・現代社会学9 ライフコースの社会学』（pp.11-27）東京：岩波書店
- 北田暁大（2005）『嗤う日本の「ナショナリズム」』東京：日本放送出版協会
- 小林多寿子（2000）「二人のオーサー」好井裕明・桜井厚（編）『フィールドワークの経験』（pp.101-114）東京：せりか書房
- 小菅敏夫（1995）『最新情報科学用語小辞典』東京：講談社ブルーバックス
- Nelson, T. (1981). *Literary Machines*. self-published. 竹内郁雄・斎藤康己訳（1994）『リテラリー・マシン』東京：アスキー出版局
- Poster, M. (1990). *The Mode of Information*. Oxford: The Blackwell Publishers. 室井尚・吉岡洋訳（2001）『情報様式論』東京：岩波書店
- 佐藤健二（2000）「社会調査はどのような歴史をたどってきたか？」大澤真幸（編）『社会学の知33』（pp.98-103）東京：新書館
- 千田有紀（2001）「構築主義の系譜学」上野千鶴子（編）『構築主義とは何か』（pp.1-41）東京：勁草書房
- 鈴木謙介（2002）『暴走するインターネット』東京：EAST PRESS
- （2005）『カーニヴァル化する社会』東京：講談社現代新書
- 歌野明弘（2000）『本の未来はどうなるか——新しい記憶技術の時代へ』東京：中公新書
- 矢野直明（2000）『インターネット術語集——サイバースペースを生きるために』東京：岩波新書
- ワイツプロジェクト（2000）『納得！最新パソコン用語 [2001年版]』東京：宝島社